

高山の文化を高めた人々

74

「音楽文化の発展とともに」

小坂計時

小坂法幸



作家 井上靖氏と
(平成2年5月28日)

昭和六年、高山市本町に生まれた父計時は、祖父利三の起こした高山レコード商會の後を継いで、社名を「有限会社コサカ楽器」と改め、代表取締役として長く経営に携わった。

利三が高山民謡保存會會長を務め三味線を担当していたこともあって、自らも三味線を嗜み、小唄が好きでよく宴席で唄っていたようである。また、日枝雅樂會にも参加して長く笙を担当していた。岐阜国體が開催された昭和四十年頃、県内の學校に吹奏樂部が整備され、盛り上がりを見せた。

計時は楽器商という稼業もあって、その取引先であった日本楽器製造株式會社（現在のヤマハ株式會社）の石上禮男氏の協力を得て、飛騨地區の各小・中・高等学校の鼓笛隊や吹奏樂の育成に努めた。中でも斐太実業高等学校の吹奏樂部には、故田中晃先生と共に特に力を注いでいたようであった。昭和四十三年に、その斐太実業高校吹奏樂部のOBたちと「高山ウインドアンサンブル」を立ち上げ、翌年には「高山市民吹奏樂團」と改名し、一昨年創立五十周年を迎えた。

さらに吹奏樂の指導者養成のため「飛騨吹奏樂研究會」を吹奏樂部顧問の先生たちと立ち上げ人材育成にも尽力した。この飛騨吹奏樂研究會と高山市民吹奏

樂團が共催して始まったのが「全飛騨吹奏樂祭」で、こちらも昨年五十回目を迎え、県内では最も歴史のある音楽祭の一つとなっている。こうした活動の特筆すべきは、現在、国の内外で活躍する多くの演奏家を誕生させたことである。



デンバーベッツァーホールで、
市吹副團長とエンスレー氏と
(平成12年10月2日)

計時は高山市民吹奏樂團の團長を三十年余り務めたが、中でも姉妹都市デンバーへ公式訪問團として三度の演奏旅行を行い、姉妹都市交流の大きな架け橋となった。

昭和四十五年には高山少年少女合唱團の立ち上げに関わり、保護者會長を十年余り務めるなど、團の活動をサポートしてきた。

昭和五十一年、利三、保浅太郎氏と共に飛騨地方の民謡をレコード化した「飛騨民謡集」を作成した。これにより盆踊りの「飛騨やんさ」や「高山音頭」「めでた」「東海道」などを後世に遺すことができた。

た。現在ではこのレコードをCD化して、「松尽くし」、「日枝神社の祭囃子」なども付け加え再販している。

文化協會でも副會長として長年にわたり多くの文化活動に携わった。中でも、多くの著名人との交流を特に楽しみにしていたようであった。

計時は大の旅行好きでグルメであったので、よく旅行の計画をしていた姿が思い起こされる。晩年は透析もあって思うような旅行はできなかったが、毎年二月の洲さき様の「節分會」はとても楽しみにしていた。本番が終わるとすぐに次の演目について話し出し、数か月前から三味線の練習を始める熱の入れようであった。



CBC高山放送局で飛騨民謡集録音(左から計時、利三、保浅太郎氏)

計時の足跡とその思いは現在の若者たちに引き継がれ、さらなる飛騨の音楽文化の発展に寄与していると思うのと同時に、次なる世代に大いに期待したい。(平成二十八年没)